

< 研究報告 >

近代仏教史における久保角太郎の位置づけ

橋口豊彦

日本の近代における仏教系の新宗教として在家主義を標榜する霊友会という教団がある。霊友会は立正佼成会などその後多くの教団を輩出し、それらの多くは依拠する經典など基本的な要素を共有している。本稿は、その霊友会を創立した久保角太郎と彼が成し遂げようとしたことの、近代仏教史における位置づけを検証しようとするものである。

久保角太郎は1892年1月7日に千葉県の小湊(現在の鴨川市)の魚の仲買と船宿を家業とする松鷹家の四男として生まれた。しかし、戸籍によると父親は不明で、母親の美弥も、角太郎の姉・兄達の実母ではあったが、角太郎の実母であったかどうかは定かではない。しかし、その美弥も角太郎が11歳の時に他界している。この父親が不明で母親を少年期に失いしかも実母であったかどうかは定かではないという心理的な依り処のなさが、その後の角太郎の考え方と行動に少なからず影響を及ぼしていることは否定できないように思われる^①。

角太郎は9歳のころより大工の見習いとして働きはじめ、その後14歳の時には東京に出てきて、大工をしながら夜は日英学館、研数学館、工手学校に通った。やがて、その勤勉な働きぶりが認められて1918年には内務省に、そして1919年には宮内省内匠寮に勤務することとなる。

そこでもその誠実な人柄が認められ、上司にあたる仙石子爵によって、旧出石藩の勘定奉行であった久保家の跡取り養子として推薦されることとなった。

その久保家には久保志んという未亡人がおり、そこに跡取りとして養子に入ると言うことはその世話をするという意味も意味していた。しかし、久保志んは潔癖症でありその他の問題も抱えている人であったため、その世話は苛酷を極めた。夜中に何度もトイレに起き、その潔癖症ゆえにその度に服を着替え手を丹念に洗うため、その介助を毎回しなければならなかったのである。しかし、少年期に母を失った角太郎は、志んに対して実母に対するような気持ちで誠心誠意尽くした。

久保志んは基本的には人格者で信心深く、角太郎も少なからず影響を受け、志んのことを深く敬愛していた。角太郎が仏教に関心を抱くようになったのも、毎日経文の読誦を欠かさなかったという志んの影響もあったようである^②。志んもまた、二十数年前に夫に先立たれ、その四年後には最愛の一人娘にも先立たれて

*本稿は2016年6月4日(土)第24回日本近代仏教史研究会 研究大会(於:立正大学品川キャンパス)に於いて発表されたものです。

以来、全くの孤独な生活をしてきた人であった。それ故、実の親に対するようにどこまでも尽くしてくれる角太郎に対する信頼は日に日に増していくのであった。

しかし、志んは更なる深刻な問題を抱えていた。それは夜中に突然何者かに取り憑かれたように侍のような声を出して刀をもって暴れるというものであった。しかも、翌朝には本人にはその記憶は全くないのであった。角太郎がこの問題に頭を悩ましていた頃、同じく東京に出てきていた七つ年上の兄、小谷安吉は、彼らの長兄である彦太郎の後妻たかの実家にあたる山口民之助宅で「西田無学」が創始した活動について知ることとなる^③。そして、角太郎も彼らの活動に参加することとなった。

西田無学（1850-1918）とは本名は西田利蔵で、1850年に現在の三重県松坂市で生まれた。そして、1906年2月12日には衆生済度の大願を起し、独特の『法華経』の解釈による先祖の供養を広く説き始め、自らを常不軽無学と称した^④。

西田無学の思想は、『法華経』「常不軽菩薩品第二十」の、すべての人が仏になれることを信じて決して誰も軽んじず、ひたすらに尊重礼拝するといういわゆる但行礼拝行をその発想の原点として、その対象を死者にまで広げ、法華経の開経である無量義経からの抜粋と同じく結経である仏説観普賢菩薩行法経からの抜粋をもって、供養するというものであった。特に、自らの先祖は自分自身に繋がる最も縁のある人々であり、その供養を他人任せに（僧侶に供養してもらうという事）するのは、自分自身を他人任せにするに等しいとして、自ら自身の先祖を供養するという在家主義による先祖の供養の重要性を強調した。

西田はまた、仏法における人々の平等性を強調し、既成仏教において布施の金額によって戒名の格付けまでなされている事に強く反発し、全ての人に平等に生・院・徳という文字が含まれた法名を付け直し、それを成仏への願いの象徴として、真心を込めて供養するというシステムを作り出した。

西田無学とその弟子たちは横浜・東京周辺の墓地を回り、誰からも顧みられることなく無縁仏になってしまった墓を掃除し洗い清め、新たに戒名を付け直して供養した。戒名が社会的地位やお布施の額によって格差をつけられるのが一般的であったのに対して、西田のように、誰に対しても差別なくしかも無料で戒名をお送りして、経を読誦するというやり方は画期的なことであったと思われる。

久保角太郎が西田無学の存在を知った頃には、西田本人はすでにこの世を去っていたが、弟子の増子西治がその活動を引き継ぎ、角太郎はその増子から西田の活動を知る事となる。角太郎はそのやり方に大いに啓発された。当初は養母の久保志んの問題解決への手がかりを見つけることが目的であったが、西田の思想と

活動に啓発された角太郎は、これを機に本格的な法華經研究と、より普遍的な方法論の確立のための試行錯誤へと没入していくことになる。

というのも、角太郎はこの西田の思想と行法に大きな影響を受けたが、もともと西田無学という類まれなるカリスマに引き寄せられる形で自然発生していた当時の信者集団とその信仰形態は、西田に対する依存体質が強く、西田が他界してしまった今となってはそれ以上の広がりも発展も期待しえない状況にあったことと、方法論自体に関してもそれをそのまま踏襲しようとはしなかったとみられる証拠が残されており、そのころから既に西田とは違う思いを持つようになっていたと考えられるからである。

西田の残したグループで使用されていた経巻は無量義經と仏説觀普賢菩薩行法經を中核としているもので、そのオリジナルともいえる明治45年の初版では「回向唱」という部分に「有縁無縁の諸精靈」という記述が見られる。しかし、大正13年に久保角太郎が施主者として増刷したものには、この「有縁無縁の諸精靈」という記述が削除されているのである^⑤。この一見些細なことに見える改変に、久保角太郎の意図するものが垣間見えるように思われる。そこで、西田の意図した先祖供養と、角太郎の目指した先祖供養はどこがちがうのかを検証してみたい。

しかし、その前に、先祖供養とは言っても様々な解釈があるため、その用語の使われ方と定義を整理しておきたい。その為には先ずは、今一般に先祖供養といわれている伝統仏教が深く関わってきた日本における祖先祭祀の歴史を概観し、それと西田の活動の軸ともなる先祖供養の考え方との比較をし、更にはそれともまた一線を画す久保角太郎の意図した先祖供養がどのような関係にあるのかを順番に見ていきたい。

それによって、日本における伝統的な祖先祭祀とそれに携わってきた伝統仏教のあり方、その中で久保角太郎が志向した新たな先祖供養のとらえ方というものがどのような関係にあるのかを検討したい。

日本古来の祖先祭祀の伝統

古来、人類は安定した食料供給と生活の保障を願い、それを左右すると信じた自然神などの目に見えない存在を祀り、加護を願った^⑥。

農耕が始まってからは、耕作地を開拓した始祖と、始祖によってもたらされた生活手段を継承・管理運営する為の系譜集団の役割が重要性を増した。日本ではそれを「家」とよんで、その繁栄と永続が第一義とされるようになった。

その家の系譜集団に繋がる人々は、死後、集合的な「祖霊」となり、その祖霊は古来の自然神信仰とも結びついて農作物の生育状況やそれに影響を与える自

然現象までも左右し、さらには系譜集団に属する人々の生活状況にも影響を与えると信じられるようになった^⑦。

このような、祖霊信仰の風習は洋の東西を問わずアフリカからアジアまで、一神教が普及する以前はおそらく世界各地に見られたと考えられることから^⑧、日本でも有史以前からの風習であったと推測される。

現在でも世界各地に残存している祖霊信仰に共通している特徴は、順当な死に方をして、子孫によって正しく祀られた者は、その魂はやがて集合的な「祖霊」へと溶け込んでゆくが、事故死や変死をした者、子孫によって正しく祀られなかった者は、祖霊にはなれず、永遠に浮遊霊として彷徨い、時には生者を悩ますと考えられていることである。

多くの場合、各部族には祖霊信仰におけるメッセンジャーとしてシャーマンが存在するが、彼らはそれらの浮遊霊を生活圏から排斥しようとはするが、彼らを救うことはしない。何故なら、彼らの目的は「安定した食料供給と生活の保障」を願う為に正しく「祖霊」を祀ることであって、死後祖霊になる以外に死者が休まる場所が他にあるとは考えていないので、手の施しようがないのである。従って、この浮遊霊の存在は祖霊信仰においては、目的外ではあるがそれゆえに対応も手薄な厄介な問題だったのである^⑨。

現代のタイの山間少数民族における祖霊信仰の研究でも、このような祖霊になれなかった浮遊霊が仏教僧によって救われたという逸話が報告されている^⑩。先にも述べたとおり、祖霊信仰が「安定した食料供給と生活の保障」を目的とするのに対して、仏教は個人の覚醒と魂の救済を目的としている。祖霊信仰において取り残され見捨てられた存在が、仏教僧によって救済されるという構図は、仏教が外来宗教として輸入された古代の日本においても同様に見られたようである^⑪。

日本に仏教が伝来して以降、仏教僧が彷徨える死者の救済と鎮魂に活躍したという記述は、様々な文献に数多く見られる。これは角度を変えてとらえれば、仏教の僧侶達は祖霊信仰において対応が手薄だった部分を補完する形、つまり、祖霊になれなかった浮遊霊を救済するという役割を人々から期待されて、葬送儀礼においても重要な役割を果たすようになったと考えられるのである^⑫。

その事が、今日に至るまで、伝統仏教が葬式仏教と言われ、人々を仏教において教化するというその本来の目的よりも、もっぱら葬儀の中心的な担い手と想われてしまっている遠因のように思われる。

蛇足にはなるが、日本の仏教は伝来後まもなく国家レベルでのサポートを受けるようになったが、その目的は東大寺・国分寺の例を見ても分かるとおり「鎮護国家」であり、災いをもたらす目に見えないものを鎮める為であった。

つまり、聖徳太子の十七条憲法などの例外を除けば、日本の仏教はその教義そのものよりも、国家レベルでも「災いを鎮める」という祖霊信仰的な発想からの役割の方を期待されていたということである。

このように、昔も今も、日本人にとっては、一部の例外を除き、古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」ということが、あらゆる宗教儀礼の第一義の目的であって、縁起の理法に目覚めるなどという仏教本来の教えなど二の次だったということである。海外からは多くの国民が仏教徒であると思われている日本ではあるが、その内実は、本来の仏の教えが十分に浸透したとはとても言えない状況にあることは否定できないであろう。

守護を求める古来の祖霊信仰と利他行としての西田の先祖供養

西田無学にとっての先祖供養とは、それまでの伝統的な祖霊信仰をベースとする祖先祭祀とは、意図も目的も違うものであった。先にも述べたように、伝統的な「祖霊信仰」の目的は、自分達に生活手段をもたらしてくれた系譜である「家」に繋がる「祖霊」を祀ることによって、自分達が家の祖霊から「安定した食料供給と生活の保障」をしてもらうことであった。つまり、家の祖霊に守護してもらうことが目的であった。

しかし、西田無学の先祖供養は、守護してもらうためではなく、法華経の常不軽菩薩の精神を持って、一人でも多くの迷える衆生(亡者)に経を聞いてもらい、仏弟子としての戒名を送って、迷いから脱してもらうことを願ってのものであった。しかも、その供養の対象は家の先祖だけでなく見ず知らずの無縁仏も含む不特定多数の死者全てであった。それゆえに、西田の先祖供養は万霊供養とも言われた。

もちろん西田の考え方の中にも自らの先祖が迷った状態にあると、自分自身の生活の中にも様々な障害が現れる故に、自ら先祖を供養して先祖の迷いを取り除けばそれによって自分たちの生活も健全なものにしていけるという考え方があった。

しかし、その考え方は、伝統的な祖霊信仰における、祖霊になり切れなかった浮遊霊が災いをもたらすという考え方とは趣を異にするもので、先祖と自分というものは一体のものであり、先祖が迷っているということは自分自身の根幹に迷いを背負っていることになり、そのままでは健全な生活は望めない。それ故に、先祖を自らの手で供養することによって、自らの存在の根幹部分の病巣を治癒しようという趣旨であった。

ただし、西田の先祖供養の目的はそれだけに留まらず、先に述べた万霊供養とも言われるように、有縁無縁つまり自分に縁の有る無しに関わりなく全ての死者を差別なく満遍なく供養していこうと言うものであった。それは見捨てられた死

者をも差別なく供養するという正に法華經の常不輕菩薩の精神を地で行くような利他行のあり方でもあるが、誰もが容易に成し得る事ではなく、一般人にはいささか荷が重く、それ故に、普遍的な行法にはなりにくいという側面を持っていたのである。

より普遍的な方法論を模索した久保角太郎

先にも述べたように、久保角太郎はもっと誰もが参加しうる普遍的な菩薩行の確立の必要性を感じていた。特に関東大震災の惨状を目の当たりにして、ごく少数の心ある人間が膨大な数の不特定多数の死者の供養することなど不可能であり、それよりも、一人ひとりの人間が自らの手で自分に繋がる先祖の供養をすれば良いのであり、その実践者の数を限りなく増やして行くことこそがその広がりにおいて無限の可能性を持っていることに思い至ったのである。しかも、一人一人の先祖とは、自分の父方と母方に繋がる父母双系の全ての先祖であり、先祖を供養するならばそれは父母双系の先祖供養でなければならないという結論に達したのである。

先に述べたように、西田の残したグループで使用されていた経巻を大正13年に久保角太郎が施主者として増刷したものには「有縁無縁の諸精霊」という記述が削除されている。それは「無縁の諸精霊」ではなく一人一人が確実に「有縁の諸精霊」の供養をすべきであるという角太郎の思いからであったように思われる。しかも、それが大正12年の関東大震災の直後のことだったというところに角太郎の思いが伺えるのである。

家の先祖供養から個人の先祖供養へ

それまでの日本古来の祖霊信仰をベースとする伝統的な祖先祭祀の伝統では、家の先祖を祀ることが目的であり、嫁いできた嫁も嫁いだ先の祖先祭祀に参加するわけであり、墓も基本的には～家の墓ということになる。そして伝統仏教も基本的にはその形態の祖先祭祀の儀礼に参画してきたわけである。しかも、その形態は現在でも殆ど変わってはいない。しかし、久保角太郎が発想した先祖供養とは家の先祖を供養するわけではなく、あくまで個人一人一人にとっての父母双系の先祖を供養するものであった。

霊友会の創立

ただ、角太郎がそのような父母双系の先祖供養の必然性に至り着くまでには多少の紆余曲折があった。

角太郎は西田の活動に参加することを契機として、自ら本格的な法華經研究に乗り出し、水行などの厳しい修行も実践した。そのような角太郎の法華經による

修行に呼応するように、先に述べた久保志んが夜な夜な取り乱す状況が改善されて行ったのであった。角太郎は人間の心が生み出す様々な事象の不思議を体験し、自らの体験を検証すべく、当時巷で有名になりつつあった南千住の若月チセのもとを訪ねるようになった。

若月チセは元々はごく普通の主婦であったがある時、日蓮聖人の活動写真を見て以来信仰心が芽生え、その後友人に誘われて行徳の本行寺で一週間にわたる罪障消滅の修行に参加した時に突然、特殊な能力に目覚め、以来目を見張るような能力を発現しはじめたとされている。その噂を角太郎も聞きつけて、自分の修行で体験したことと、若月が述べるのが驚くほど一致していることに意を強くしたようである。角太郎は若月の所で戸次貞雄とも知り合い、意気投合し、共に新しい宗教運動を立ち上げようということになった。若月チセも当初は賛同していた。そして、新しい宗教運動は霊友会と命名された。その後、戸次貞雄は福島に転居し、そこを拠点に福島霊友会として活動を始め、若月チセの拠点は南千住霊友会と呼ばれた。しかし、法華経による普遍的な菩薩行の普及を目指していた角太郎と、自分の能力によって人々の救済に役立つだけで良しとする若月チセの考え方の違いは次第に表面化し、角太郎も徐々に若月との活動に限界を感じるようになった。

角太郎は自らの修行によって人間の心が持っている様々な可能性に目覚めていたため、特殊な能力をもった特別な人に依らずとも、人は誰でも特定の修練によって心を研ぎ澄ますことは可能であることを確信していた。そして、特定の個人の特殊な能力に依存しない誰でも参加できるということにこそ、普遍的な菩薩行の可能性があると信じていたため、それを証明するためにも、角太郎は、それまでごく普通の生活をしていた兄の小谷安吉夫妻と一緒に霊友会の活動に参加するように呼びかけた。

それ以来、小谷安吉とその妻である小谷キミは厳しい修行に入ることとなった。そして、その活動拠点は赤坂霊友会と言われるようになる。以来3年以上にわたる厳しい修行の結果、角太郎が確信していた通り、小谷安吉も小谷キミも共に極限まで心が研ぎ澄まされた状態に到達したとされている。

そして、昭和3年には角太郎と小谷夫妻によって、西田らの経巻をベースに西田が時期尚早として読誦を禁じていた法華経本文からの抜粋を含めた、今の霊友会系諸教団が所依の經典としている「青経巻」の原型を完成させている。翌年、厳しい修行で体力を使い果たした小谷安吉は、自分は昭和4年の12月31日の夕方に霊界に帰ると友人知人に連絡した上で、その通りに他界したということである。

安吉の死後、角太郎は小谷キミとともに昭和5年7月13日に大日本霊友会の発会式を行った。これは、正式には当時まだ併存していた赤坂霊友会と南千住霊

友会と福島霊友会の三つの霊友会合同の発会式という事になってはいたが。若月チセも戸次貞雄も参加せず、実質的には赤坂霊友会のみによる発会式となった。若月のグループも戸次貞雄のグループもその後はそれぞれ霊友会とは別団体として活動することとなった。

自己確認としての久保角太郎の先祖供養

先にも述べた通り、久保角太郎にとっての先祖とは「家の祖霊」でもなければ「不特定多数の亡者」でも無かった。父親が不明で母親も少年期に失っていた角太郎にとっては、不明でも不在であっても、自分という存在は確かに父と母がいたからこそ現実に存在している訳だし、その父と母もそれぞれの父母がいたからこそ存在していたのであった。

つまり、父母に連なる父母双系の全ての先祖の集大成として今の自分が存在している訳で、仏教的な意味で考えても、父母から自分へと繋がる連綿とした因とそれぞれの関わりとしての縁の繋がりの結果として今の自分が存在していることは誰も否定することは出来ない厳然とした事実なのであった。

そして、その事実こそが、本当の父母が不明であった角太郎にとっては、自分の存在を根拠づける確固たる真実であり、それは誰にとっても平等に真実なのであった。この誰もが平等に父と母の子であるという真実の認識こそが全ての人の平等の根拠でもあると角太郎は考えたのである。

さらに、父母双系の先祖全ては今の自分の在り方に多かれ少なかれ影響を与えており、それら双系の先祖との繋がりに思いを馳せ、その影響を自らの内に自覚することが自らの在り方を認識することの出発点になると角太郎は考えた。

そういう自覚のもとに、今の自分の行動を改めることが、双系の先祖からの繋がりの連鎖をより良いものにしていくことになり、それが本当の意味での先祖の供養になると考えたわけである。

つまり、久保角太郎にとっての先祖とは大きな意味での自分自身であり、その大きな意味での自分自身である自らに繋がる双系の先祖に思いを馳せながら法華経（具体的には無量義経・妙法蓮華経・仏説観普賢菩薩行法経のダイジェスト版である「青経巻」を読誦した）を読誦するという行為は、自分自身に法華経を聞かせ、自身の在り方そのものに縁起の理法を覚知することに繋がると彼は考えたのである。

要するに、父母双系の先祖全てとの縦の繋がりと、様々な人々との横の繋がりの真ただ中にある今の自分が、それらの縦と横の繋がりが因と縁となって常に自分の在り方に影響を与えていることを認識すること、その覚知つまり「気づき」をもって自らの日々の行いを改めることを「因縁解決」「懺悔滅罪」と呼んだ。

このように久保角太郎においては「先祖供養」と後に霊友会でも強調された「根性を直す」こととは表裏一体のものであった。

また、そのやり方を自分に縁のある他者とも共有することによって、その他者もまた自らの双系の先祖に想いを馳せながら法華経を読誦し、因と縁の繋がりの中にある自分という存在のあり方を自覚し、そのような自覚をもって日々の行いを改めることが各人に関わる因と縁の繋がり全体をより良いものにしていくことができる、つまり「因縁解決」「懺悔滅罪」できるようになると彼は考えた。これを後に霊友会では「導き」と呼ぶようになる。

そして、そのような法華経による双系の先祖の供養というやり方を通じた、各自それぞれにおける因と縁との繋がりとその意味を自覚するプロセスが人から人へと共有されて行き、その過程での気づきが互いに話し合われることによって、法華経の説く「法が語られる場」が自然に生まれる。角太郎はそのような法が語られる場を「法座」と呼んだ。そうやって、すべての人が互いに法師となって仏の教えをより多くの人に伝えていくという法華経の菩薩行の理想が実現できると角太郎は考えたものと思われる。

自己確認の象徴としての総戒名の創案

久保角太郎は、そのような自己確認としての双系の先祖の供養の為のシンボルとして、総戒名と言われるものを創案した。これは、父母双系の先祖すべてに対して送られるシンボリックな戒名とも言えるもので、自分に繋がる全ての先祖が自分自身とともに仏の教えに目覚めて行くことを祈念するためのものである。前述したとおり、それは双系の先祖全てとの繋がり象徴するものであると同時に、より大きな意味での自分自身の象徴でもあるわけである。

このような形式と趣旨をもった総戒名というものは、西田無学のグループには存在せず、久保角太郎はこの独自の総戒名の創案によって、それまでの西田による万霊供養という無限定で壮大な利他行としての意味合いの強かった西田流の先祖供養を、より身近で現実的な自己確認としての意味合いの強い先祖供養へと大きく方向転換したと言えよう。

誰にでもできる在家の菩薩行の確立

先に見たとおり、角太郎は西田の残した経典の中にあつた「有縁無縁の諸精霊」という部分を削除した。そして、自身に繋がる双系の先祖を象徴する総戒名というものを創案した。これによって、角太郎は法華経による先祖の供養という行為を自身の在り方そのものに縁起の理法を覚知しようとする行為へと体系付け、そのやり方を他者とも共有することによって、まさに「我らと衆生と皆ともに仏道を成ぜん」という法華経の理想とする菩薩行へと昇華させようとしたと言える。

西田のように見捨てられた死者をも差別なく供養するという正に法華經の常不輕菩薩の精神を地で行くような利他行のあり方もあるが、先にも述べた通りそれは誰もが容易に成し得る事ではない。

それに対して、今生きている一人でも多くの人に、自らのうちに縁起の理法を覚知するというやり方を示して、共に菩薩道を歩もうとするやり方は、その広がり方の可能性としては法華經の説く「菩薩が仏の教えを無限に広げていく」という理念に近いのかもしれない。

先の「有縁無縁の諸精霊」という無限の数の諸精霊を、西田のようなカリスマを持った特異な人物やその弟子達が細々と供養するよりも、角太郎が創案した総戒名という自らに縁の有る双系の先祖をそれぞれの子孫が供養し、そういうやり方の輪が無限に広がっていく方が、永続性においても広がりにおいても、はるかにより多くの衆生と諸精霊を仏道へと誘う事ができると角太郎は考えたのであろう。

事実、角太郎達が創案した法華經による双系の先祖供養仏教とも言える新たな方法論は、その後大きな拡がりを見せ、多くの分派も生み出し、それらの分派全てを合わせた公称会員数を合計すると千数百万人を越え、ある意味で日本最大級の宗教運転へと発展した。

しかしながら、伝統仏教が日本古来の祖霊信仰的な宗教観念と折り合いをつけながら存続するしかなかったように、角太郎が目指した在家による法華經の菩薩行の実践という高邁な理想も、そのまま人々に受け入れられたとは言い難く、多くの場合はそれまで僧侶に頼んでいた先祖の供養が自分で出きるようになり、しかも、居ながらにして母方の先祖まで供養できるようになったと言うような受け取り方に留まり、その目的も、先祖を自分で供養して、日々トラブルが起こらないように先祖に守護してもらおうと言う祖霊信仰的な発想から一歩も抜け出せていない場合も少なくなかったようである。

やはり、日本においては先祖供養という言葉そのものが、自動的に古来の祖霊信仰の観念を伴うものであったことがその大きな要因の一つであると思われる。

まとめ

以上見てきたように、古来の日本における祖先祭祀の伝統は、祖先によってもたらされた生活手段の継承システムとしての「家」の永続を第一義とし、家を継承する子孫達が「安定した食料供給と生活の保障」をしてもらう為に、祖霊を祭り、その加護を得ることが目的であった。また、祖霊になりきれなかった浮遊霊がもたらす災いを排除するために、伝統的に仏教僧が葬儀やそれらの祖先祭祀の儀礼に深く関わるようになってきたことも見てきた。

従って、現在一般に行われている先祖供養の儀礼というものは、本来は日本古来の祖霊信仰に起源をもつものであり、仏教の教義から導き出されたものではなく、災いをもたらすとされる浮遊霊を排除したい側の思惑と、全ての衆生の成仏を願う仏教僧とのそれぞれの方向性の違う思惑が合体したものが、現状の先祖供養の儀礼の出発点になっているともいえる。

そのような「家」を存続させるための祖霊を祀る伝統的な先祖供養に対して、久保角太郎が提唱した父母双系の先祖供養というものは、一人一人の因と縁との繋がりを悟るための仏教的な修行の一環としての趣旨を持ち、自己確認のための先祖供養であったとも言える。

このように、霊友会の創立者である久保角太郎と言う人物は、それまでの伝統的な「家の存続の為の先祖の供養」というものを「個人の生き方と自己確認のための先祖の供養」というものに転換させたのであり、言わば、「家の先祖の供養」を「個人の先祖の供養」に変えようとしたと言える。そして、同時にそれは「祖霊信仰としての先祖供養」を「仏教修行としての先祖供養」に転換しようとしたとも言える訳であるが、その角太郎の理念がそのまま大多数の人々に受け入れられたとは言い難い現実があったことも事実として付け加えておきたい。

<参考文献>

- ① 久保克児：久保角太郎－「父母双系の先祖供養仏教」の誕生
春秋社；ISBN：978-4-393-13746-9（2015/11/18）。 P. 10, L. 15-P17. L. 4
- ② 前掲書。P. 87, L. 1-P. 88, L. 5
- ③ 霊友会史編纂委員会：霊友会史－〔1〕上巻。
霊友会；（1991/11）。 P. 199, L. 3
- ④ 由木 義文：西田無学研究ノート
山喜房仏書林 ASIN: B000J7517E（1984/03）。 P. 13, L. 1-2
- ⑤ 霊友会史編纂委員会：霊友会史資料1-3
霊友会；（1988/1）。 P. 254, L. 15 & P. 259, L. 20
- ⑥ David Hume :Natural History of Religion
Oxford Univ Pr; ISBN:0192838768（1999/01）
- ⑦ 竹田聴洲：祖先崇拜－民俗と歴史
平楽寺書店；ISBN：483130008X（1957/10）。 P. 13, L. 1-P. 24, L. 5
- ⑧ Meyer Fortes :Pietas in Ancestor Worship
The Henry Myers Lecture, 1960.
<http://www.era.anthropology.ac.uk/Ancestors/fortes1.html>
- ⑨ James George Frazer :The Fear of the Dead in Primitive Religion
Ayer Co Pub; ISBN: 040509566X ; Reprinted (1971/01)
- ⑩ 小野澤ニッタヤ：タイ国黒タイ族村落における祖先崇拜
東京家政学院筑波女子大学紀要第1集1997年。P. 93-P. 104
- ⑪ 池上 良正：死者の救済史－供養と憑依の宗教学 角川選書 354
角川書店；ISBN：4047033545（2003/07）。 P. 21, L. 7-L. 10
- ⑫ 前掲書。P. 52-P. 88